

# 研究紀要

## 第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動  
—関東・中部地方の事例研究—

尾田 譲好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚

古谷 渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係

中川 莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について

松浦 誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧

上野真由美

柴田 徹

西井 幸雄

麻生 敏隆

坂下 貴則

小茂田 幸

大屋 道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と菅玉

山田 琴子

上野真由美

赤熊 浩一

小林まさ代

大屋 道則

関東地方における周溝持建物の系譜

福田 聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年  
—無袖石室と片袖石室を対象に—

青木 弘

北武藏児玉地域における内斜口縁环の編年的位置づけ

山本 良太

盾持有人埴輪頭部の分類と変遷について

長谷川啓子

鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察  
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—

渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造  
—平城京遷都後の官寺を中心に—

香川 将慶

2016

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

### 序

- 「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 ..... 尾田 譲好 (1)  
—関東・中部地方の事例研究—
- 殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 ..... 古谷 渉 (19)
- 大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 ..... 中川 莉沙 (37)
- 縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について ..... 松浦 誠 (57)
- ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 ..... 上野真由美  
柴田 徹  
西井 幸雄  
麻生 敏隆  
坂下 貴則  
小茂田 幹  
大屋 道則 (69)
- 埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 ..... 山田 琴子  
上野真由美  
赤熊 浩一  
小林まさ代  
大屋 道則 (79)
- 関東地方における周溝持建物の系譜 ..... 福田 聖 (87)
- 埼玉県における横穴式石室の分類と編年 ..... 青木 弘 (107)  
—無袖石室と片袖石室を対象に—
- 北武藏児玉地域における内斜口縁環の編年的位置づけ ..... 山本 良太 (135)
- 盾持人埴輪頭部の分類と変遷について ..... 長谷川啓子 (149)
- 鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察 ..... 渡邊理伊知 (163)  
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—
- 古代寺院における食堂院の構造 ..... 香川 将慶 (181)  
—平城京遷都後の官寺を中心に—

# 埼玉県における横穴式石室の分類と編年 —無袖石室と片袖石室を対象に—

青木 弘

**要旨** 本稿では埼玉県内の横穴式石室のうち、無袖石室と片袖石室を対象として分類と編年を試みた。無袖石室は68例中46例を対象に、5類型に分類した。これらの類型は、平面形が狭長な類型（短冊形A類型）から幅広の（羽子板形A類型）へ推移する。この変遷観は、出土遺物からも追認でき、本県における横穴式石室の導入期であるMT15型式期からはじめり、7世紀代まで散発的に構築される。片袖石室は19例中13例を対象に、5類型に分類した。事例も少なく、構造も多様だが、おおよそTK10～TK209型式期にかけて構築される。無袖石室にみる導入の特徴は、はじめに児玉地域の小円墳に採用され、首長墳は遅れること、古墳構造は後の事例に続く構造と技術が認められること、類型内で同一構造の古墳があることが挙げられる。埼玉県における横穴式石室の導入は、それまでの豊穴系埋葬施設の築造技術の延長ではなく、横穴式石室の築造技術そのものが新たにもたらされたと考えられる。

## はじめに

埼玉県における無袖・片袖石室の分類と編年に関する研究は、増田逸朗による研究をはじめ、坂本和俊や岡本健一、小林修、草野潤平らが進めてきた（増田1977、増田1995、坂本1979、岡本1994、小林修2008、草野2010）。加えて、無袖石室は本県における横穴式石室の導入を追究する上で重要な資料であるため、そうした観点からの研究も行われている（山崎・金子1997、小林孝2008など）。また、無袖石室は地域間での比較検討もみられる（土生田編2010）。こうした現状から埼玉県内の横穴式石室研究に求められる点は、蓄積された資料をもとに、他地域との比較が可能な基礎の再構築が挙げられる。これは、横穴式石室に限らず、他資料（埴輪・土器等）の研究と比較する上でも必要な分析である。

筆者は、これまで埼玉県における横穴式石室の集成や個々の分析を進めてきた（青木2013a/b、青木2015a/b）。本稿では、無袖石室と片袖石室について、横穴式石室の分類と編年案の再検討を試みる。

## 1. 横穴式石室の分類に関する先行研究

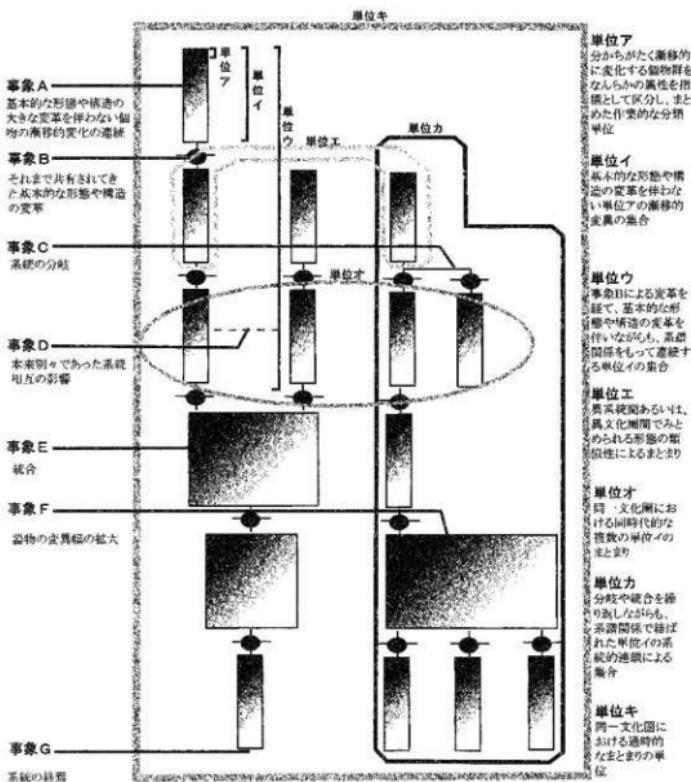
横穴式石室がもつ構造・技法（技術）・素材（石材等）といった諸属性を分析し、それを総合し、形式・型式分類を行う研究法は、尾崎喜左雄の研究を基礎とし、その後、横穴式石室研究の核となる研究分野として進められている（尾崎1966）。研究に併行して、分析の基礎となる資料集成も各地で進められている。ただし、研究と集成作業が進む反面、近年の横穴式石室の形式・型式研究は、分類設定と項目、およびその内容が複雑になっている。

日本考古学協会2007年度熊本大会分科会（九州系横穴式石室の伝播と拡散）では、「系」「型」「式」を用いた横穴式石室の分類名称が、研究者間、あるいは地域間で用法が異なり、比較研究を難しくしているという課題が挙げられた（杉井編2009）。たとえば九州地方では、「九州系横穴式石室」「肥後型石室」「北部九州型石室」「豊穴系横口式石室」などを代表に、多くの分類名稱がみられる。関東地方でも、各県・旧国単位で研究が進み、多くの分類が存在する。

近年、太田宏明は横穴式石室を対象として、分類の理論モデルを提案した（太田 2010）（第1図）。太田は横穴式石室について、分類の視点とその地域分布、階層に基づく分布のあり方を整理した（註1）。本稿に関わる部分では、分類単位とその相互の関係を理論化している（第1図）。第1図のうち、「単位ア」は、「群」（太田 2003）・「期」（河上 1995）にあたり、「単位イ」は、「○○型横穴式石室」とよばれてきた「型」概念

に相当する」とした（太田 2010）。太田は、この「単位イ」の代表例として畿内型石室を挙げている。「単位ウ」は九州地方の横穴式石室を、「単位エ」は同時期に築造された畿内型石室と筑前型石室の関係性が該当し、「単位オ」と「単位カ」は「系」概念にあたるとした。

また、太田は横穴式石室の類型設定の際に、分類要素の整理の必要性を説く。すなわち①平面・断面等の石室の形態=「形」、②石室を構成する



第1図 考古資料における分類単位と分類単位相互の関係（太田 2010）

一部の特徴的な要素＝「系」、③石室の構築技術体系およびこれらの変遷過程＝「型」とする。このうち「形」は資料の1次的整理概念としての性格が強く、「型」・「系」は分布境界領域や伝播のあり方と密接に関連し、「型」の成立要件には継続的かつ直接的な情報伝達が不可欠とする。

太田の検討は、各地で横穴式石室の研究が進展する反面、分類概念や名称の不均衡が生じ、地域間の比較検討が難しい現状を踏まえたものといえよう。

「同工石室」　土生田純之は近年、「同工石室」の概念を提唱した（土生田 2013）。土生田は長野県飯田古墳群内の3古墳を対象に、横穴式石室の石積みにおける日地や休止部に注目して、その技術的齊一性から、これらを同一工人集団による構築と評価し、このような事例を「同工石室」と称した。

筆者はこの「同工石室」について、前稿で県内の67事例を対象に、20のグループを抽出し、その分布と変遷を検討した（青木 2015a）（註2）。

「同工石室」は、グループごとに規格と細部の構造が共通した事例である。そのため、古墳建築技術の体系を共有するという点で、太田の「単位ア」（＝「型」）に該当する一面をもつ。一方、各グループ（分類）の設定条件は、複数の要素が共通する点にあり、かつ同時期に造られた事例も多い点から、「単位ア」としての一面ももつ。

「同工石室」が、本来、分けられるべき単位ア・イの側面をもつ理由には、以下の2点が考えられる。

まず、太田が個々の資料には「生産が行われる度になんらかの変容が生じるという特性がある」とする点である（太田 2010）。

次に、太田は「単位ア」を「漸移的に変化する個物群をなんらかの属性を指標として区分し、まとめた作業的な分類単位」で、「現在の研究者の目的に応じた分類体系であり、過去の分類体系と

は異なる場合が多いと推測」する（太田 2010）。

これに対して、土生田は横穴式石室の型式や類型の背景に、「築造集団」の存在を想定し、伊那谷の横穴式石室の一類型を分析し、「同工石室」を唱えた（註3）。つまり、分類の作業単位（最小単位）に「同一工人集団による築造」という歴史的評価を与えており、この点が太田の分類設定とやや異なる。

ただし、太田と土生田の分類設定は相反するものではないだろう。横穴式石室に関しては、「単位ア」が研究者の作業単位を超えて、当時の事象を正しく捉えたものであれば、「同工石室」（同一工人集団による築造）という評価に帰結するだろう。太田は、考古学者が設定した分類の背景を正しく捉えるため、分類や分布の理論的整理を行った。両氏の研究を踏まえて、分類の意味（作業単位か歴史的事象に結びつくか）について、検討する姿勢が求められている。

## 2. 分析の視点と方法

まず、本稿における地域設定は、塙野博の『埼玉の古墳』に準じ、「児玉・大里・比企・北足立・入間・北埼玉・南埼玉・北葛飾』を基本とする（塙野 2004）。必要に応じて河川・地形名を用いる。

ここでは分析に先立ち、分類要素とその組み合わせに基づく分類の設定、名称について整理する。

埼玉県の横穴式石室の研究では、すでに様々な分類が設定されている。ただし、県全体の資料を対象として分類した例は少ない。本稿では、共通の要素と概念による分類の再構築を目的とするため、あえて先行研究の分類設定は用いず、横穴式石室に関する基本的な概念から見直し、再分類したい。

### 分析要素の枠組

横穴式石室の分析にかかる属性は多岐に渡る。これらの属性を大きく分けると、素材、形（構造）、

技法（技術）にまとめられる。

素材は、横穴式石室の石材や土が該当する。石材はその産出地と事例の分布に一定のまとまりが見出されており、かつ、横穴式石室の構造を規定する重要な要素である。たとえば、凝灰岩等、加工に適した石材が分布する地域では、切石積みが発達し、礫等、加工の難しい石材が分布する地域では模様積みが発達する傾向が認められる。

形は、横穴式石室の規模や構造に関わる属性である。各地の研究では、分布する横穴式石室の構造に応じて、平面・立面形、門構造等、様々な属性が注目されている。埼玉県内の横穴式石室は、検出・遺存状況の良い例が少ないため、本稿では、平面形を中心に注目する。

平面形は以下の4種に分類した（第2図）。

短冊形（方形）：奥壁幅と羨門幅とがほぼ等しい事例が該当する。無袖・片袖・両袖石室のいずれにも認められる。

羽子板形：奥壁幅が羨門幅より大きい事例が該当する。無袖石室では、本稿で集成した68例中35例を分析し、「奥壁幅—羨門幅 = 0.5 m」以上の事例を本形態とした。

L字形：片袖石室で玄室長が玄室幅より短い形態を指す。

脇張形：側壁が弧状を呈する。

次に、奥壁の平面形について、無袖・片袖石室全体の様相から、2種に分類した（第2図）。これは両袖石室を含めると更に増加する。平面形を重視する必要のある本県の事例には、重要な要素と考えている。無袖石室と片袖石室では、直線A類か直線B類のみが該当する。

最後に、技法（技術）に関する分析要素は、石材積みや石材加工が挙げられる（第3図）（青木2015b）。

玄室側壁の石材積みは、大小の石材を規則性なく積み上げる「乱石積」と、大小の石材の使い分けが認識できる「乱石積（模様積的）」、石材の大

小があるものの横方向に目地が通る「通目積1」、板石を用いた「通目積2」、大型石材を規則的に配置する「模様積」、加工石材（削石）を下位の石積みの縦目地間に配置する「互目積（削石積）」、加工石材（切石）を切欠き等を行いつつ積み上げる「切石切粗積」、大型の板石を組み合わせる「板石組」に分けられる。

石材加工のうち、「切石」に関しては、埼玉県の事例を検討した結果、チョウナやノミによる「削り」が主体を占める（青木2015b）。そのため、埼玉県内の横穴式石室で「切石」と呼ばれている事例の大半は、厳密には「削石」の一種と考えられる。ただし、学史的に「切石」の名称が定着している現状を鑑みて、本稿ではこれを「削石」と区別した。

個々の石材の積み方は、一つの石材の形状をみて、その短辺（小口）を室内に向ける例を「短辺積」、長辺を室内に向ける例を「長辺積」とした。両者の傾向としては、自然石や角閃石安山岩の加工石材は「短辺積」が、凝灰岩の加工石材は「長辺積」が多い。

以上の分析要素をもとに、分類を行う。

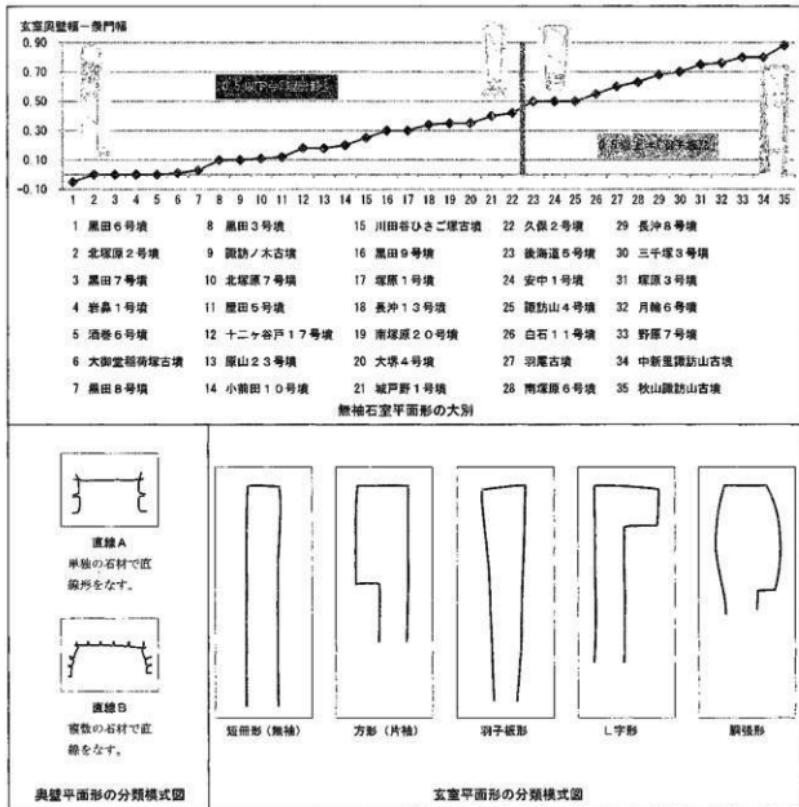
まず、袖部から「無袖石室」「片袖石室」「両袖石室」に大別し、そのうえで玄室平面形を細分する。なお、横穴式石室の「左右」は、入口からみた方向とする。

この形態分類に対して、側壁石積・石材加工・使用石材との組み合わせをもとに、横穴式石室の類型化を行う。

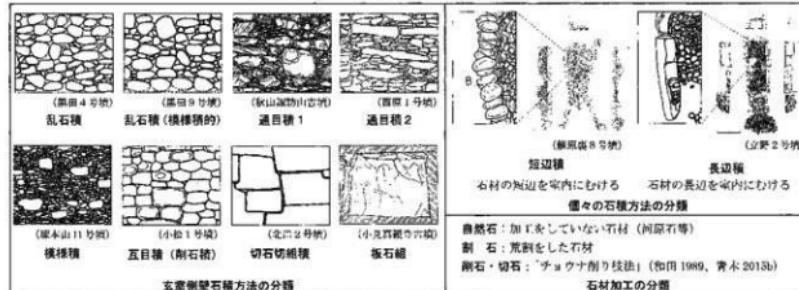
類型化のうち、各類型の変化の方向性について検討した上で、出土遺物から建築時期を推定し、編年案を提示したい。

### 3. 無袖石室の分類と変遷

無袖石室は68例認められる。そのうち、検討可能な事例は46例である（第1表）。無袖石室の玄室平面形は、「奥壁幅—羨門幅」で求められ



第2図 無袖・片袖石室における平面形の分類



第3図 横穴式石室における石積・石材加工の分類

第1表 無袖右室一覧

| 地名             | 地番名         | 面積(ha)        | 面積(ha) | 面積(ha) | 面積(ha)     | 面積(ha)  | 面積(ha) | 面積(ha) |
|----------------|-------------|---------------|--------|--------|------------|---------|--------|--------|
| 1. 秋父<br>金留    | 大里4号地(大神原)  | 吉野町<br>内      | 13.0   | ○      | 無袖右室形A     | 南西側     | 7.6    | 3.4    |
| 2. 要玉<br>世曾    | 吉田6号地       | 沖川町<br>内      | 18.5   | ○      | 無袖右室形A     | N~30°~W | 4~     | 4      |
| 3. 要玉<br>青柳    | 北原8号地       | 沖川町<br>内      | 11.9   | ○      | 無袖右室形A     | V~42°~E | 6.7~   | 不明     |
| 4. 要玉<br>古柳    | 北原8号地       | 沖川町<br>内      | 15.2   | ○      | 無袖右室形A     | N~35°~E | 5.35   | 不明     |
| 5. 廣玉<br>青柳    | 鹿谷5号地       | 沖川町<br>内      | 14.0   | ○      | 無袖右室形A     | N~27°~E | 5.5    | 不明     |
| 6. 要玉<br>人頭松   | 大里交船荷古吉地    | 上野町<br>内      | 21.6   | ○      | 無袖右室形A     | V~46°~E | 5.4    | 3.65   |
| 7. 要玉<br>長冲    | 若狭8号地       | 本庄市<br>内      | 16.5   | ○      | 無袖右室形A     | V~30°~E | 3.85~  | 2.9    |
| 8. 要玉<br>大里町   | 大里15号地      | 某別町<br>内      | 不詳     | ○      | 無袖右室形A     | V~77°~E | 5.95   | 2.09   |
| 9. 要玉<br>人頭松   | 鶴嶺8号地       | 某別町<br>内      | 14.4   | ○      | 無袖右室形A     | N~42°~E | 5.8~   | 不明     |
| 10. 大里<br>田畠   | 吉田5号地       | 深谷市<br>内      | 14.0   | (○)    | 無袖右室形A     | N~58°~E | 4.2~   | 不明     |
| 11. 大里<br>田畠   | 栗原6号地       | 深谷市<br>内      | 17.0   | 不詳     | 無袖右室形A     | N~22°~E | 5.6~   | 4.2    |
| 12. 大里<br>栗原   | 栗原7号地       | 深谷市<br>内      | 13.0   | ×      | 無袖右室形A     | N~44°~E | 4.8~   | 3.0    |
| 13. 大里<br>栗原   | 栗原8号地       | 深谷市<br>内      | 11.0   | ○      | 無袖右室形A     | N~40°~E | 1.85   | 不明     |
| 14. 大里<br>栗原   | 栗原9号地       | 深谷市<br>内      | 18.0   | ○      | 無袖右室形A     | V~34°~E | 5.35   | 3.3    |
| 15. 大里<br>小林田  | 小林田9号地      | 吉田町, 深谷市<br>内 | 17.0   | ○      | 無袖右室形A     | N~49°~E | 5.8~   | 2.2    |
| 16. 比企<br>金森   | 前野1号地       | 吉田町<br>内      | 5.0~   | 不詳     | 無袖右室形A     | N~74°~E | 2.8~   | 0.9    |
| 17. 比企<br>西脇   | 酒井8号地       | 吉田町<br>内      | 15.0   | ○      | 無袖右室形A     | 南面西     | 3.9    | 3.9    |
| 18. 要玉<br>古柳   | 南原20号地      | 神戸町<br>内      | 24.0   | ○      | 無袖右室形A     | N~34°~W | 7.5    | 5.1    |
| 19. 要玉<br>青柳   | 城山町1号地      | 神戸町<br>内      | 12.0   | ○      | 無袖右室形A     | N~25°~E | 4.85   | 1.85   |
| 20. 要玉<br>青柳   | 二ノ谷1号地      | 神戸町<br>内      | 12.5   | ○      | 無袖右室形A     | N~40°~E | 4.85   | 2.9    |
| 21. 要玉<br>古柳   | 二ノ谷17号地     | 神戸町<br>内      | 不詳     | ○      | 無袖右室形A     | N~33°~W | 4.05   | 2.95   |
| 22. 要玉<br>栗原   | 栗原2号地       | 本庄市<br>内      | 30.5   | ○      | 無袖右室形A     | N~92°~E | 5.84   | 4.22   |
| 23. 要玉<br>日本大丸 | 大里4号地       | 本庄市<br>内      | 不詳     | 不詳     | 無袖右室形A     | N~45°~E | 5.9    | 2.5    |
| 24. 要玉<br>日本大丸 | 大里12号地      | 本庄市<br>内      | 38.6   | ○      | 無袖右室形A     | 不詳      | 7.35   | 不明     |
| 25. 要玉<br>日本大丸 | 日本大丸8号地     | 本庄市<br>内      | 13.0   | ○      | 無袖右室形B-1   | V~41°~E | 6.9    | 1.85   |
| 26. 要玉<br>白石   | 白石2号地       | 吉田町<br>内      | 23.1   | ○      | 無袖右室形B-1   | V~10°~E | 5.85   | 1.68   |
| 27. 大里<br>栗原   | 見日1号地       | 深谷市<br>内      | 19.0   | (○)    | 無袖右室形B-1   | V~7°~E  | 3.5    | 1.6    |
| 28. 大里<br>栗原   | 栗原2号地       | 深谷市<br>内      | 16.5   | 不詳     | 無袖右室形B-1   | 南面西     | 4.2~   | 不明     |
| 29. 大里<br>小林田  | 小林田10号地     | 吉田町, 深谷市<br>内 | 18.0   | ○      | 無袖右室形B-1   | V~15°~E | 5.9    | 1.2    |
| 30. 大里<br>栗原   | 栗原11号地      | 深谷市<br>内      | 18.0   | ○      | (無袖右室形B-1) | V~40°~E | 3.28~  | 0.95   |
| 31. 比企<br>金森   | 神代5号地       | 吉田町<br>内      | 18.7   | ○      | (無袖右室形B-2) | V~25°~E | 5.61   | 2.95   |
| 32. 要延良<br>栗原  | 栗原1号地       | 栗原町<br>内      | 不詳     | ×      | 無袖右室形B-2   | 南面东     | 4.3    | 1.25   |
| 33. 要延良<br>栗原  | 栗原2号地       | 栗原町<br>内      | 1.0    | ○      | 無袖右室形B-2   | N~95°~W | 5      | 2.8    |
| 34. 秋父<br>安中   | 安中1号地       | 秩父市<br>内      | 10.0   | ×      | 無袖右室形B-2   | V~15°~E | 5.9    | 1.2    |
| 35. 要玉<br>青柳   | 南原6号地       | 神戸町<br>内      | 37.0   | ○      | 無袖右室形A-1   | N~55°~E | 8.15   | 不明     |
| 36. 月見<br>栗原   | 牛平4号地       | 神戸町<br>内      | 42.0   | ○      | 無袖右室形A-1   | N~32°~W | 7.5    | 5.1    |
| 37. 要玉<br>長冲   | 糸井4号地       | 本庄市<br>内      | 26.3   | ○      | 無袖右室形A-1   | N~51°~E | 6.66   | 3.57   |
| 38. 要玉<br>秋山   | 秋山5号地       | 本庄市<br>内      | 60.0   | 不詳     | 無袖右室形A-1   | N~31°~W | 9.07   | 2.07   |
| 39. 要玉<br>白石   | 白石1号地       | 吉田町<br>内      | 17.2   | ○      | 無袖右室形A-1   | N~45°~E | 6.1    | 3.8    |
| 40. 要玉<br>古柳   | 栗原2号地       | 某別町<br>内      | 不詳     | (○)    | 無袖右室形A-1   | N~29°~E | 5.05   | 5.05   |
| 41. 月見<br>栗原   | 栗原3号地       | 深谷市<br>内      | 23.0   | ○      | 無袖右室形A-1   | 南面西     | 7      | 6.2    |
| 42. 大里<br>栗原   | 野原2号地       | 高谷市<br>内      | 20.0   | ○      | (無袖右室形A-2) | N~20°~W | 5~     | 2.6    |
| 43. 比企<br>月見   | 月見6号地       | 深谷市<br>内      | 11.3   | ○      | 無袖右室形A-2   | V~25°~W | 3.41   | 3.20   |
| 44. 比企<br>平    | 羽生占8号(平1号地) | 深谷市<br>内      | 20.0   | ×      | 無袖右室形A-2   | 南面西     | 3.8~   | 1.7    |
| 45. 北条<br>栗原   | 栗原10号地      | 栗原町<br>内      | 12.5   | ○      | 無袖右室形A-2   | N~90°~W | 4.7    | 3.5    |
| 46. 比企<br>三ツ屋  | 三ツ屋3号地      | 栗原町<br>内      | 17.5   | ×      | (無袖右室形A-2) | 南面      | 5~     | 1.6    |
| 47. 入間<br>高砂   | 高砂2号地       | 猪之山町<br>内     | 24.0   | ×      | (無袖)       | N~27°~W | 6.6    | 2.2    |
| 48. 入間<br>高砂   | 後山1号地       | 猪之山町<br>内     | 不詳     | 不詳     | 不詳         | N~5°~W  | 3.77~  | 2.6    |
| 49. 要玉<br>青柳   | 北原15号地      | 神戸町<br>内      | 19.0   | ○      | (無袖右室形B-1) | N~46°~E | 5.9    | 3.65   |
| 50. 要玉<br>羽生   | 羽生10号地      | 某別町<br>内      | 不詳     | ○      | (無袖右室形B-1) | N~14°~E | 4.8    | 不明     |
| 51. 速澤<br>百合   | 白石12号地      | 某別町<br>内      | 19.5   | ○      | (無袖右室形A-1) | N~47°~E | 5~     | 3.45   |
| 52. 要玉<br>古柳   | 二ノ谷3号地      | 神戸町<br>内      | 18.0   | ○      | 無袖右室形      | N~29°~E | 1.45~  | 1.37   |
| 53. 要玉<br>栗原   | 栗原2号地       | 上野町<br>内      | 18.0   | ○      | 無袖右室形A-1   | N~63°~E | 5.4    | 不明     |
| 54. 要玉<br>栗原   | 生野4号地       | 某別町<br>内      | 不詳     | 不詳     | 無袖右室形      | 浅瀬西     | 不明     | 1.5    |
| 55. 要玉<br>栗原   | 白石5号地       | 某別町<br>内      | 32.5   | ○      | 無袖右室形      | N~12°~E | 4.6    | 不明     |
| 56. 要玉<br>栗原   | 栗原2号地       | 神戸町<br>内      | 11.0   | ○      | 無袖右室形      | N~36°~E | 5~     | 1.35   |
| 57. 要玉<br>古柳   | 越1町7号地      | 神戸町<br>内      | 14.0   | ○      | 無袖右室形      | N~23°~W | 4.55~  | 1.3    |
| 58. 要玉<br>古柳   | 少ヶ谷14号地     | 神戸町<br>内      | 11.0   | ○      | 無袖右室形      | N~18°~E | 4.5    | 2      |
| 59. 要玉<br>古柳   | 生野3号地       | 神戸町<br>内      | 16.5   | ○      | 無袖右室形      | N~24°~E | 6.73   | 不明     |
| 60. 要玉<br>青柳   | 北原4号地       | 神戸町<br>内      | 17.5   | ○      | 無袖右室形      | N~30°~E | 3.65   | 0.9    |
| 61. 要玉<br>青柳   | 北原8号地       | 神戸町<br>内      | 15.5   | ○      | 無袖右室形      | N~13°~E | 3.75   | 1.13   |
| 62. 要玉<br>古柳   | 北原10号地      | 神戸町<br>内      | 16.5   | ○      | 無袖右室形      | N~29°~E | 4.6    | 不明     |
| 63. 要玉<br>長冲   | 長冲4号地       | 木花町<br>内      | 不詳     | 不詳     | 無袖右室形      | N~7~W   | 4.44~  | 1.3    |
| 64. 要玉<br>木花山  | 木花山13号地     | 木花町<br>内      | 16.0   | 不詳     | 無袖右室形      | N~20°~W | 5.38   | 不明     |
| 65. 大里<br>奥田   | 奥田1号地       | 深谷市<br>内      | 18.0   | ○      | 無袖右室形      | N~50°~E | 3.8~   | 不明     |
| 66. 大里<br>栗原   | 栗原10号地      | 栗原町<br>内      | 17.0   | ○      | 無袖右室形      | N~40°~E | 2.8~   | 不明     |
| 67. 比企<br>平子   | 平子4号地       | 栗原町<br>内      | 30.0   | ○      | 無袖右室形      | N~65°~W | 不詳     | 不明     |
| 68. 比企<br>三ツ屋  | 範原太郎三丁目1号   | 栗原町<br>内      | 23.0   | ○      | 無袖右室形      | N~20°~W | 5.38   | 不明     |



る値によって、「短冊形」と「羽子板形」に区別できる(第2図)。そのうち、奥壁幅が狭門幅よりも小さい形態は、無袖石室には認められない。

### 3-1 無袖短冊形A類型

本類型は、全長に対して幅の狭い狭長な形態が該当する(第4図)。神川町北塚原2号墳や同北塚原7号墳、深谷市黒田9号墳、同小前田9号墳などが代表例である。このタイプは全長5~6m前後、奥壁幅が1m前後にまとまる傾向があり、自然石を用いた乱石積が主体である。個々の石材の積み方は、短辺積みが多い。奥壁の石積みは多様で、大型石材を1段、ないしは2段積む例に加えて、広木大町15号墳のように模様積に近い積み方をする事例もある。石材加工のない例が大半だが、黒田6・7・8号墳では、奥壁や隅石のみ凝灰岩の加工石材を用いており、他の類型と比較する上で注意を要する。

事例巾、北塚原2・7号墳、黒田8・9号墳、小前田9号墳は同一構造をもつ(青木2015aのグループ1)。同じく神川町大御堂稻荷塚古墳と黒田3・6・9号墳も同一構造をもつ(グループ2)。

反面、行田市酒巻6号墳と東松山市岩鼻(1)5号墳は、前者が角閃石安山岩、後者が凝灰岩の加工石材を用いており、他例とは異なる特徴をもつ。しかし、どちらも類例がないため、現状では細分せずに本類型に含めておく。

### 3-2 無袖短冊形B-1類型

本類型は、全長に対して幅の広い形態が該当する(第5図)。神川町城戸野1号墳や同十二ヶ谷戸10号墳、広木大町4号墳などが代表例である。このタイプは全長5~7m前後、奥壁幅が1.4m前後にまとまり、自然石を用いた乱石積や通目積みが主体をなす。個々の石材の積み方は、短辺積みの事例が多い。奥壁石材は1段ないしは2段積む例が多い。石材加工のない例が大半で、南塚原20号墳のみ割石の石材を用いている。

事例巾、南塚原20号墳・長沖13号墳・小前田10号墳・黒田11号墳・塚原1号墳が同一構造をもつ(グループ3)。また、城戸野1号墳・十二ヶ谷戸10号墳・十二ヶ谷戸17号墳(グループ4)、および広木大町4・8・9号墳も同一構造である(グループ5)。

### 3-3 無袖短冊形B-2類型

本類型は、形態は無袖短冊形B-1類型に属するが、使用石材、石積み、石材加工がB-1類型と異なるため区別した(第6図)。事例は嵐山町屋田5号墳、桶川市川田谷ひさご塚古墳、同原山23号墳が該当し、いずれも凝灰岩切石積石室である。個々の石材の積み方は、短辺積みと長辺積みの併用と、長辺積みのみの例がある。屋田5号墳のみ石材加工が鋭く、他例と比較すると加工技術の未成熟な例といえる。本例は、比企地域における切石加工技術を検討する上で重要な事例と考えられる。

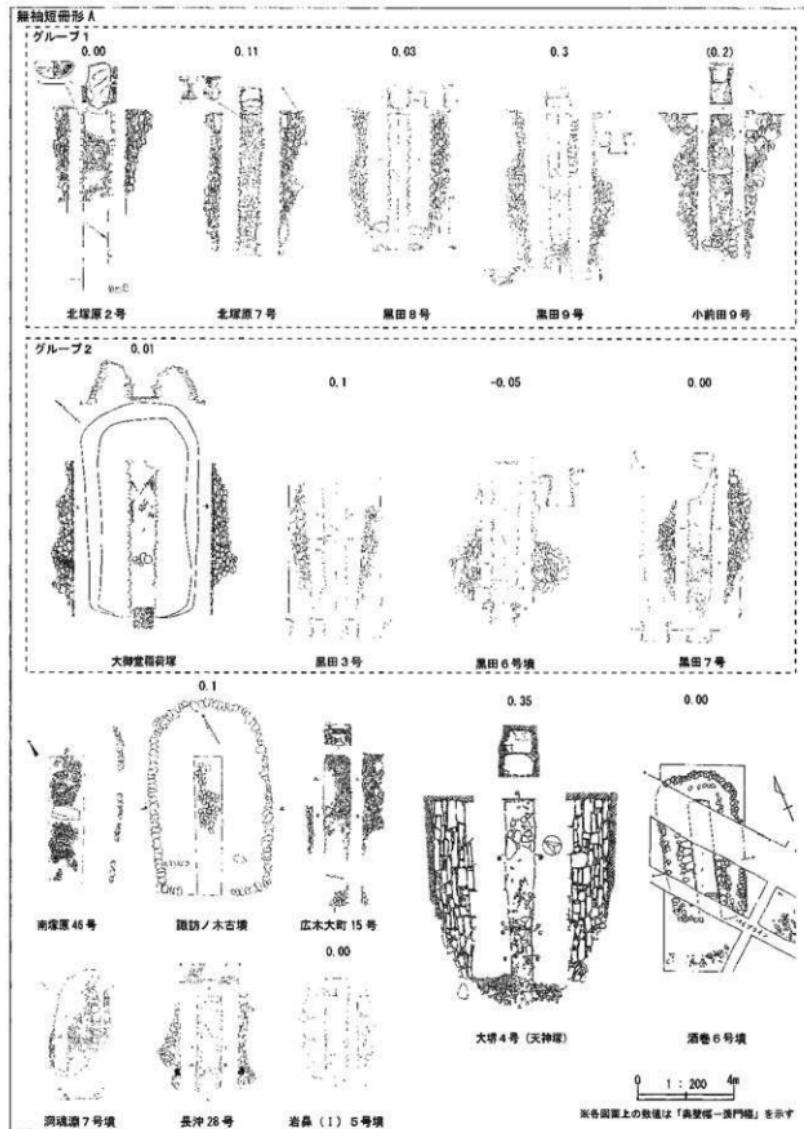
### 3-4 無袖羽子板形A-1類型

本類型は、奥壁幅に対して狭門幅が短く(奥壁幅-狭門幅=0.5m以上)、「羽子板形」を呈する(第6図)。規模は全長6mから8mといったバラツキがみられる。これは本庄市秋山諏訪山古墳(前方後円墳60m)や神川町南塚原6号墳(円墳37m)といった、墳丘と横穴式石室の規模が比較的大きい事例が含まれるためだろう。このタイプは、自然石を用いた乱石積や通目積が主体である。個々の石材の積み方は短辺積みが多い。石材加工はみられないが、秋山諏訪山古墳のみ割石を用いた可能性がある。なお、秋父市安中1号墳は、規模・構造とともに他例と異なるが、類例もないため本類型に含めておく。

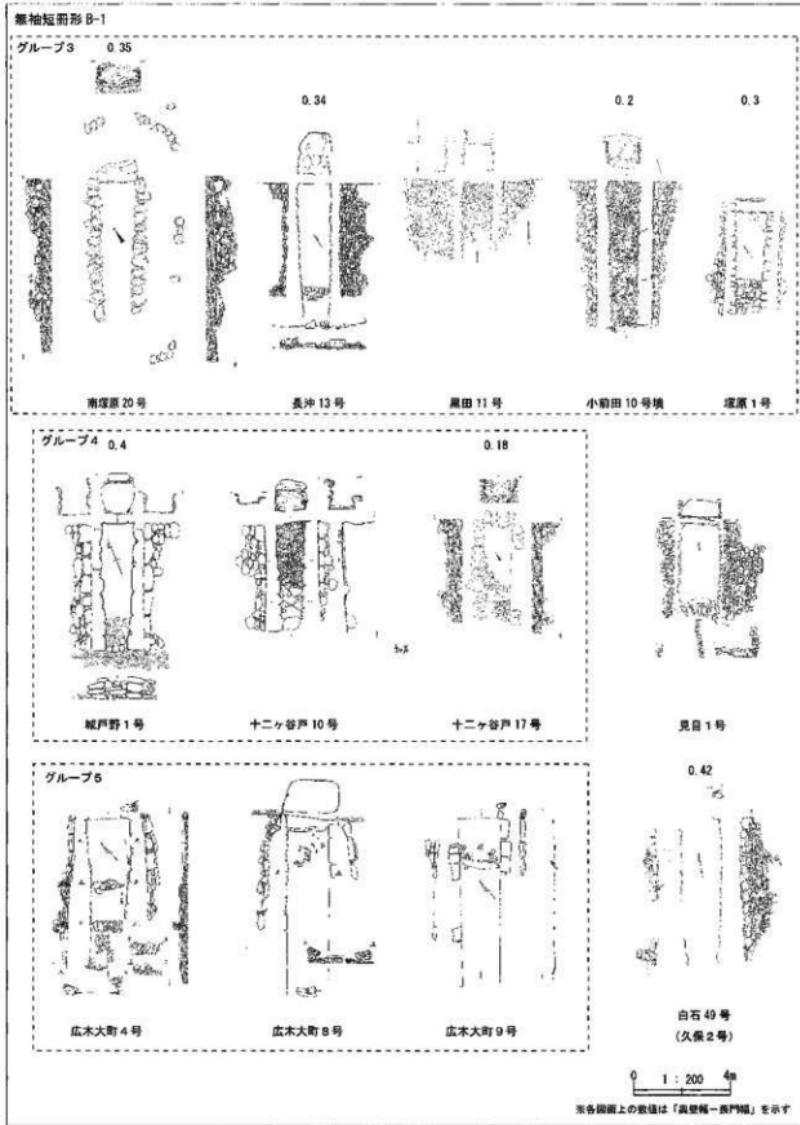
### 3-5 無袖羽子板形A-2類型

本類型は、形態は無袖羽子板形A-1類型に属するが、使用石材、石積み、石材加工がA-1類型と異なるため区別した(第7図)。

事例は熊谷市野原7号墳や東松山市諏訪山4号



第4図 無袖石宿の諸類型1



第5図 無袖石室の諸類型2

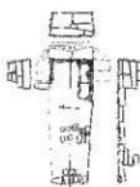
無袖短形 B-2

0.12



岩田 5号

0.25



川田谷ひさご塚

0.18



原山 23号

無袖羽子板形 A-1

0.5



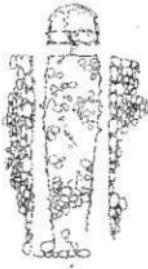
白石 41号  
(後海道 5号)

0.55



白石 11号

0.63



南塙原 6号

0.68

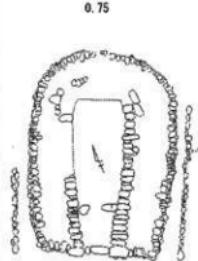


長沖 6号

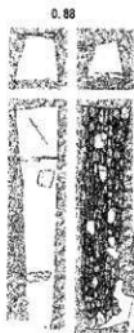
0.8



中新里糞訪山古墳



塙原 3号

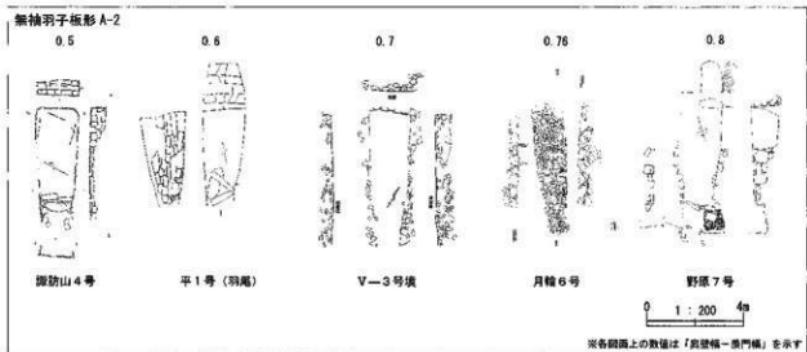


秋山塙防山

第6図 無袖石室の諸類型3

0 1:200 4m

※各面圖上の破綻は「異壁幅一箇門幅」を示す



第7図 無袖石室の諸類型4

境が該当し、凝灰岩の割石や石を通目積、あるいは切削積にする例が主体をなす。個々の石材の積み方は、長辺積みがやや多い傾向にある。

以上、無袖石室については、5類型に分類した。次にこれらの形式変化の方向性についてみていくたい。

### 3-6 類型の変化の方向性

無袖短冊形A類型は、自然石を乱石積や通目積にし、奥壁に大型石材を用いる。平面形態は細長く、幅は人ひとりがかろうじて通行できる程度である。

無袖石室全体の玄室幅をみると、短冊形A類型よりも短冊形B—1・B—2類型や羽子板形A—1・A—2類型の方が玄室幅が広い。横穴式石室内部での葬送という行為を想定すると、玄室幅が広い方がより通有の形態と考えられ、短冊形A類型→その他の無袖類型という玄室幅の拡大という方向性が第一に想定できる。

次に、短冊形B類型と羽子板形A類型の関係は、奥壁幅と羨門幅の差が小さい短冊形B類型が、短冊形A類型に準じた平面形の規格方法と推定される。一方、羽子板形A類型は、羨門幅を狭める構造や構石を設置する事例が多く、片袖・両袖石室に通じた形態ともみなせよう。この点から短冊形

B類型→羽子板形A類型という方向性を想定したい。

短冊形B—2類型や羽子板形A—2類型は、凝灰岩の加工石材を用いた横穴式石室で、形態は、それぞれ短冊形B—1類型と羽子板形A—1類型に準じる。ここに短冊形B—1類型→B—2類型、羽子板形A—1類型→A—2類型といった使用素材と加工技術の拡大という方向性が考えられる。

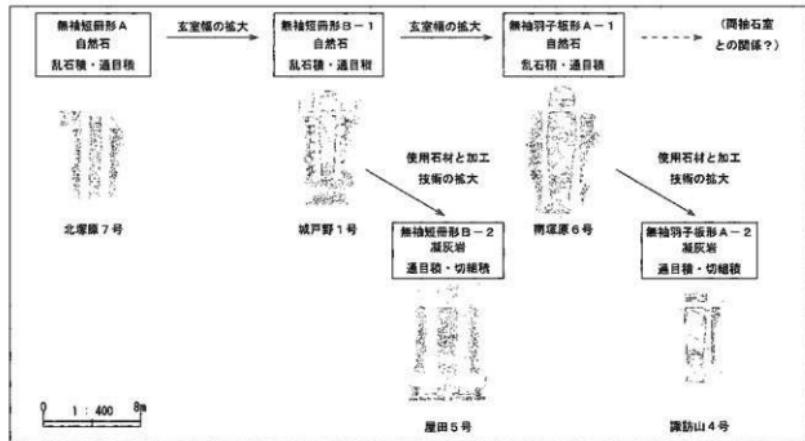
以上より、各類型の変化は、短冊形A類型→短冊形B—1類型→(短冊形B—2類型)→羽子板形A—1類型→(羽子板形A—2類型)と想定したい(第8図)。

### 3-7 無袖石室の構造

無袖石室で注目される点は、北塙原2号墳など初期の類型であっても、緑泥片岩の大型石材を奥壁に使用する点である。石材の大型化や奥壁段数の変化は、畿内の横穴式石室研究では、編年の指標の一つとされているが、北武藏の横穴式石室においてこうした現象は認められない。

なお、石積みは乱石積が主体で、通目積や切石積の事例が増加するのは両袖石室導入以降である。

裏込構造をみると、北塙原7号墳は横穴式石室に馬蹄形控え積類型が伴う(註4)。羨門石材は、

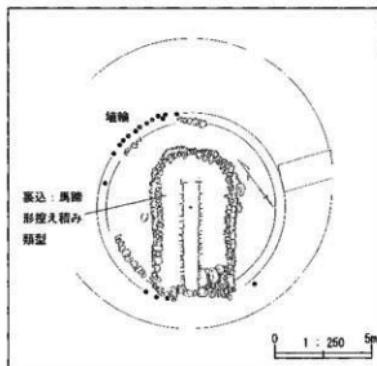


第8図 無袖石室における類型変化の方向性

控え積の行列と埴輪の葺石列に接続し、控え積行列と埴輪列の基点となる（第9図）。北塚原7号墳の狭門石材は、遺存状態が悪く判然としないが、児玉地域を中心に、狭門に大型石材を数段横積みに積む事例がみられ、その一種だろう。

そして、本墳では葺石列から間隔をおいて埴輪列が検出されている。葺石列と埴輪列から復元された埴輪の中心は、玄室奥壁から約1.28m狭門寄りにあり、埴輪の中心は奥壁に位置しない。壁面の石積みをみると、奥壁は2段積みで、奥壁寄りの側壁基底石にやや大きめの石材を置く。側壁は乱石積だが、水平方向の石積み目地が奥壁の石積み目地と大凡合致する。青柳古墳群北塚原支群の調査は、未報告のため詳細に検討できないが、北塚原支群は全ての石室に控え積が伴うとされる（増田ほか 1988）。この控え積は周辺事例を参考にすると、礫や砂利を多用したと思われる。なお、基礎構造は不明である。

黒口9号墳も報告書掲載写真を見る限り、馬蹄形控え積み型をもち、その石室構造・規模・主軸は北塚原7号墳に類似する。基礎構造は、床面が



第9図 北塚原7号墳の埴輪構造

現地表面より20cmほど高い点から、石敷類型か土敷類型と想定している。

小前田9号墳も馬蹄形控え積をもつが、埴輪の状態が悪く、葺石や埴輪列の状況は不明である。ただし、横穴式石室の石積みをみると、奥壁は2段積みで、奥壁寄りの側壁基底石にやや大きめの石材を置く。側壁は通目積だが、水平方向の石積み目地が奥壁の石積み目地と合う。基礎構造はや

や不明な点を残すが、旧表上上を盛上等で整地した上に石室を構築した墳丘盛上類型と想定している。

このように、古墳構造の觀点から無袖石室を導入した古墳を見直すと、北塚原7号墳等の事例で馬蹄形控え積類型をもつ点、羨門石材を基点に各部の石材・石列が関連し合う点、横穴式石室の石積みの目地が、奥壁と側壁とで合う点から、横穴式石室と墳丘構造の関連性が強いことがわかる。

また、無袖短冊形A類型には、同一構造をもつグループが2つある。

以上より、無袖石室でも各部構造が互いに関連し合い、後の事例に通じる構造（建築技術）をもつことがわかる。古墳同上でも同一構造のある点を踏まえると、無袖石室においても、専門集団による高い技術が駆使されたことが想定できる。

### 3—8 無袖石室の出土遺物

ここでは、前章までの分析結果を踏まえ、各事例の出土遺物の傾向から、建築時期を推定したい。

#### 無袖短冊形A類型

まず、上述したように、同一類型のなかでも、さらに細部まで似た構造をもつ場合、これらは素材獲得や建築集団について近しい背景をもっていると想定でき、建築時期も同時期か、相前後する時期と考えられる。

北塚原2号墳では、土師器环が横穴式石室の床面から出土している。これは増田逸朗の指摘以来、本墳の建築時期がMT15型式とされる根拠となっている（註5）（増田1977）。

北塚原7号墳では、MT15型式とされる須恵器高环と罐が出土している。黒田3・6・7・9号墳、大御堂稻荷塚古墳、広木大町15号墳、小前田9号墳は、それぞれ北塚原2号墳、あるいは北塚原7号墳と同様の構造をもつ点から、建築時期は6世紀前半の範疇におさまると考えられる。そのうち、小前田9号墳は、大谷徹によりTK10型式期（6世紀中葉）とされる（大谷1999）。

調訪ノ木古墳は、横穴式石室の遺存状態が悪いものの、出土埴輪が山崎武の円筒埴輪編年ではⅢ期（MT85-TK43型式）に、井上裕一の馬形埴輪編年ではⅣa期新（6世紀第2四半期後半）とされ、おおよそMT85-TK43型式期（6世紀中葉）の築造と考えられる（井上1995、山崎2000）。

酒巻6号墳は角閃岩安山岩を用いている。本石材を利用する横穴式石室は、6世紀後半以降にみられる。酒巻6号墳は、出土遺物も鉄鐵片のみだが、埴輪列が検出されており、6世紀後半の範疇におさまるだろう。

岩鼻（I）5号墳は、出土遺物もなく埴輪の有無も不明なため、樹根に乏しい。本例のように、比企地域で凝灰岩を用いた横穴式石室の確実な事例は、6世紀後半以降に認められる。そのため、本墳も同様の時期の築造としておきたい。

大堺4号墳（天神塚古墳）は、出土遺物が本墳から出土したと伝えられる直刀以外無く、検討材料に乏しいが埴輪が出土している。本墳は、秩父地域で数少ない後期古墳と考えられる。本地域では、終末期以降に多くの古墳が造られ、本墳が所属する金崎古墳群も同様である。こうした状況から、現状では本墳は6世紀後半の築造と想定しておきたい。

以上より、無袖短冊形A類型は6世紀前半の築造事例が主体を占め、それらは児玉・大里地域にのみ認められる。比企・北埼玉・秩父地域の事例は6世紀後半の築造と考えられる。

#### 無袖短冊形B—1類型

城戸野1号墳は出土遺物が不明だが、玄室幅と羨道幅が無袖短冊形A類型に比べて幅広になっている。本墳は、横穴式石室の構造上、短冊形A類型に次ぐ時期の築造と考えられる。本墳の建築時期はTK10-TK43型式期（増田ほか1989）、MT85-TK43（山崎・金子1997）、6世紀中葉（草野2010）とされている。現状ではこれらの時期として大過ないだろう。本墳と同一構造としたそ

のほかの事例も、個々の群集墳内で前後関係はあるものの、本時期の範疇に収まると考えられる。

以上の点から無袖短冊形B—1類型は、TK10（MT85）・TK43型式期の築造を中心とした事例が多い。

#### 無袖短冊形B—2類型

屋田5号墳は、山崎武の円筒埴輪編年ではIV期（TK43-TK209型式）に、井上裕一の馬形埴輪編年ではIVc期（6世紀第3四半期後半）とされる。

川田谷ひさご塚古墳は、山崎武の円筒埴輪編年ではIV期（TK209）とされ、かつ生出塚窯跡産の埴輪が並べられる（山崎2000）。城倉正祥の同工品分析では、III期とされる（城倉2011）。横穴式石室から出土した馬具は、関義則と宮代栄一の研究からTK43-TK209型式期とされる（関・宮代1987）。本墳はこうした遺物の研究からTK43-TK209型式期の築造と考えられる。

原山23号墳は埴輪の樹立が認められず、瀧瀬芳之の大刀研究では、出土した大刀は7世紀前半とされる（瀧瀬1991）。横穴式石室はやや胴張りが認められ、これは両袖胴張形石室の影響ともみられるため、屋田5号墳、川田谷ひさご塚古墳に比べて新しい7世紀前半の築造と考えられる。

以上より、本類型は短冊形B—1類型に後出する時期の築造と思われる。

#### 無袖羽子板形A—1類型

秋山調訪山古墳は直刀、鉗（無窓）、精木片、鉄鎌、弓金具、玉類や須恵器群（环、無蓋高环、短頭壺、甕、提瓶）が出土しており、これらの研究からTK10型式期の築造とされる（菅谷ほか1990）。

長沖8号墳は、大谷徹による長沖古墳群の考察ではV期（6世紀後葉）、山崎武の円筒埴輪編年ではIV期（TK43-TK209型式期）、藤野一之の藤岡産須恵器の分析では、補強帶環がV～VI期（TK43-TK209型式期併行）とされ、TK43-TK209型式期の築造と考えられる（君島・大谷

1999、山崎2000、藤野2013）。

白石11号墳も藤野一之の藤岡産須恵器の分析では、補強帶環がV～VI期（TK43-TK209型式期併行）とされる（藤野2013）。

安中1号墳は、出土遺物がなく詳細は不明だが、埴輪の出土がなく7世紀代の築造と考えられる。

のほかの事例は埴輪をもち、上述の事例の年代観を踏まえると、本類型はTK43-TK209型式期の築造を中心とする。

#### 無袖羽子板形A—2類型

野原7号墳は、出土遺物が少なく根柢に乏しいが、埴輪をもつ点と無袖羽子板形A—1類型の事例の年代観を考慮すると、TK43-TK209型式期の築造と推定される。調訪山4号墳も同様である。

月輪6号墳は直刀、鉄鎌、刀子、弓飾金具、耳環、玉類、土製品、十師器环・鉢・壺・埴・高环・台付甕といった遺物が出土している。須恵器は提瓶・高环のほか、滑川町五厘沼窯跡や東松山市南比企窯跡恒平窯跡産の蓋環が出土している。これらの出土遺物と埴輪をもたない点から、本墳は7世紀初頭の築造と考えられる。羽尾古墳や三千塚V・3号墳は根柢に乏しいが、埴輪をもたないため、7世紀代の築造と推定される。

本類型はTK43-TK209型式期の事例に加えて、7世紀以降の例もあり、やや時期差が認められる。

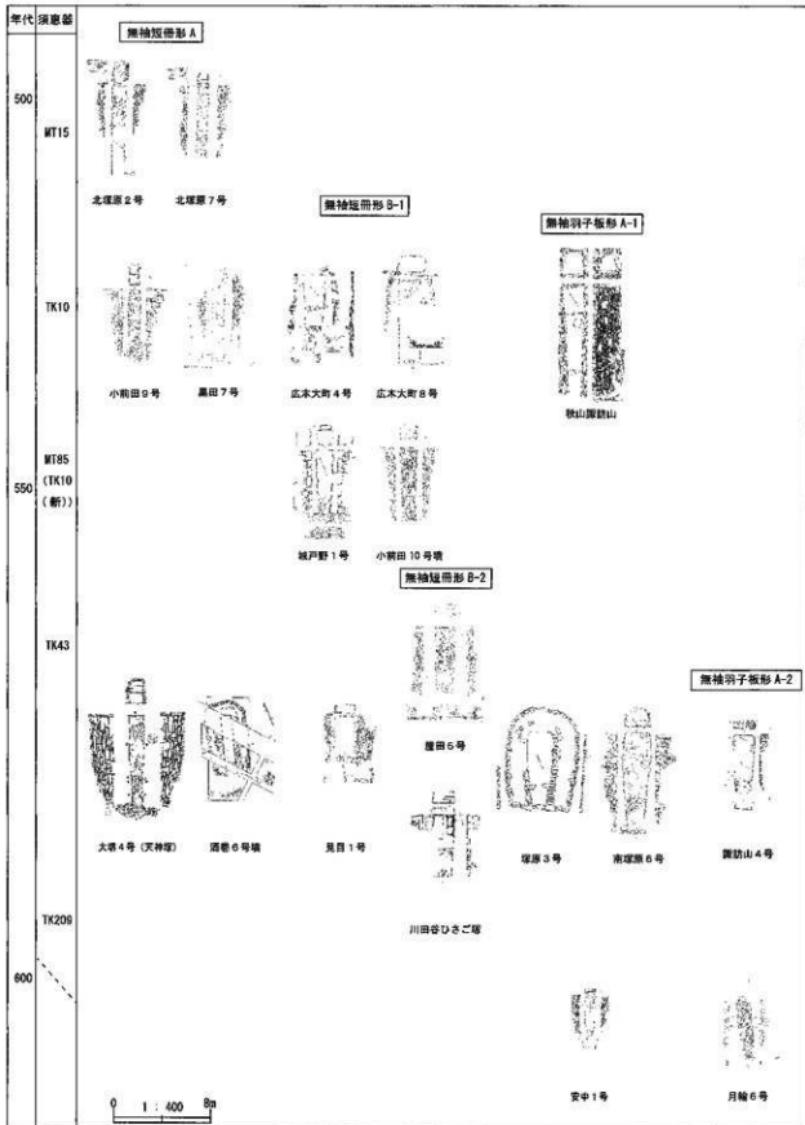
#### 3—9 無袖石室の編年試案

第10図に編年試案を示した。

無袖石室全体の傾向としては、先行研究でも言及されてきたように、6世紀前半代の事例が多く、埼玉県内でも導入期の横穴式石室と位置づけられる。短冊形A類型から、羽子板形A—1（A—2）類型へと推移する傾向が認められる。

#### 4. 片袖石室の分類と変遷

片袖石室は19例認められる（第2表）。そのうち検討可能な事例は13例である（第11・12図）。



第10図 埼玉県における無袖石室の編年

かつて岡本健一が分析したように、県内の片袖石室は、「玄室長：玄室幅」や「玄室長：羨道長」の値が示すような平面規格上の共通性は乏しく、形態上のまとまりに欠ける（岡本 1994）。強いてあげるならば、玄室から羨道にかけて両側壁が平行な平面形となる「方形」と、玄室から羨道にかけて両側壁が狭まっていく平面形となる「羽子板形」、玄室の長軸長が短い「L字形」に分けられる。片袖石室は事例数が少なく、平面形も差異が大きいため、最低限の分類に留めたい。無袖石室と両袖石室に対して、事例が少なく、事例間の形態上の共通点に乏しい点は、反面、これらが片袖石室の特徴ともいえようか。

#### 4-1 左片袖方形類型

本類型は、玄室が方形を呈する（第 11 図）。北塚原 6 号墳、埼玉將軍山古墳、三千塚第Ⅷ支群長塚古墳などが該当する。北塚原 6 号墳のみ側壁に河原石を、奥壁に自然石を用いた乱石積で、そのほかの事例は、凝灰岩の割石・切石を用いた通目積が主体をなす。埼玉將軍山古墳には房州石を用いる特徴が認められる。

#### 4-2 左片袖羽子板形類型

本類型は、玄室から羨道にかけて両側壁が狭まり、玄室が羽子板形を呈する（第 11 図）。生野山 16 号墳、野原 13 号墳後円部石室、三千塚第Ⅷ支群秋葉塚古墳後円部石室が該当する。そのうち生野山 16 号墳は、河原石を用いた乱石積・通目積で、残る 2 例は凝灰岩の割石・切石を用いた通目積である。

#### 4-3 左片袖 L 字形類型

本類型は、玄室の長軸長が短い平面形で、十二ヶ谷戸 15 号、諏訪山 3 号墳が該当する（第 12 図）。両者は同じ類型とはいえ、全長、玄室規模に共通性はない。石材も十二ヶ谷戸 15 号墳が河原石を用いた乱石積・通目積で、諏訪山 4 号墳が凝灰岩の切石積と異なる。

#### 4-4 右片袖 L 字形類型

本類型は、右袖部方向に玄室が広がる平面形で、黒田 4 号墳のみが該当する（第 12 図）。本例は河原石を用いた乱石積で、加工石材を用いていない。石材や石積みは、無袖短冊形 A 類型や無袖短冊形 B-1 類型の黒田 7・8・11 号墳と類似する。

#### 4-5 右片袖胴張形類型

本類型は玄室が胴張形を呈し、野原 13 号墳前方部石室のみが該当する（第 12 図）。破壊がひどく石積みは不明瞭だが、凝灰岩の切石を用いた通目積と考えられる。

上記の例以外に、片袖石室と推定される事例は、遺存状況が悪く検討できない（第 2 表）。

#### 4-6 片袖石室の類型変化の方向性

片袖石室は事例が少ない上に、各事例の個体差も大きいため、類型の変化の方向性は不明瞭である。そのうち、平面 L 字形は小林修が上野地域との関係のもとに成立したとする（小林修 2008）。片袖石室の事例における切石積は、無袖石室と同様に、両袖石室導入後に認められる。

#### 4-7 片袖石室の構造

片袖石室の事例で構造の分かること例は少ない。裏込構造は、児玉地域の十二ヶ谷戸 15 号墳で馬蹄形控え積み類型が、比企地域の三千塚第Ⅷ支群 2 号墳で土の互層類型が確認できる。両地域の事例で裏込が推定できる資料は、同様の傾向が認められる。無袖石室と同じく、片袖石室においても、地域によって裏込に用いる材料と方法が異なることがわかる。この特徴は両袖石室にも継続する（青木 2013b）。

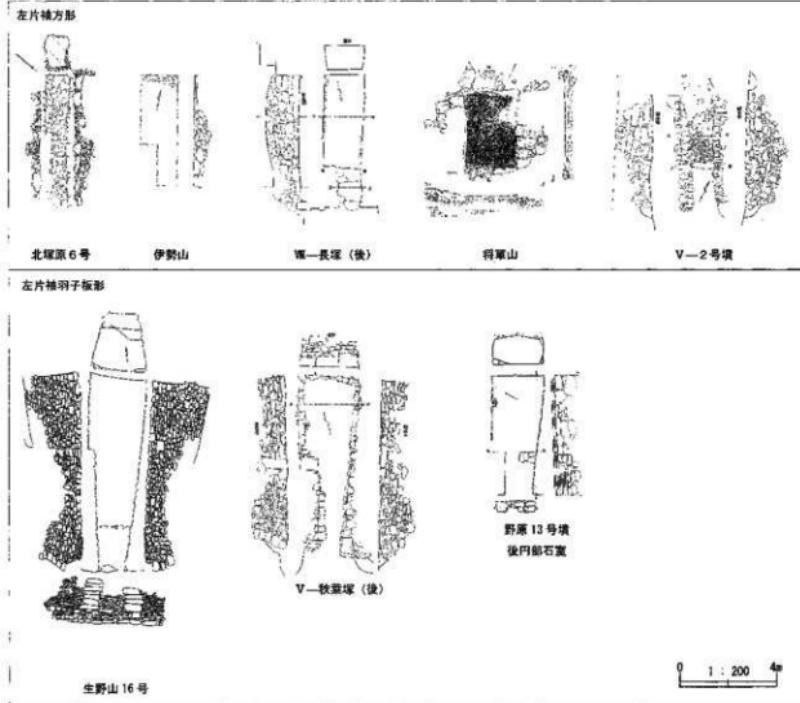
#### 4-8 片袖石室の出土遺物

##### 左片袖方形類型

北塚原 6 号墳は、出土した埴輪から 6 世紀前半（増田ほか 1989）、ないし MT15 型式期（山崎・金子 1997）の築造とされる。本墳は狹長な平面形、乱石積、奥壁に大型石材を 1 枚用いる点が無袖短冊形 A 類型の北塚原 2 号墳に共通する点か

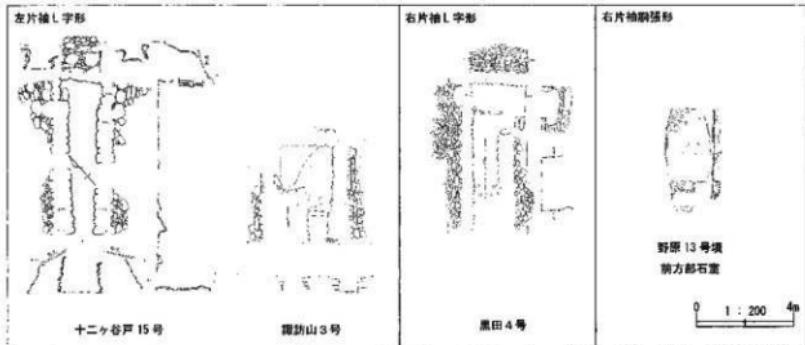
第2表 片袖石室一覧

| 番号  | 墓名        | 位置               | 形状        | 長さ    | 幅   | 高さ     | 壁厚      | 天井高   | 底面形  | 蓋    |           |
|-----|-----------|------------------|-----------|-------|-----|--------|---------|-------|------|------|-----------|
| 1.  | 足柄<br>吉原  | 北堀原6号墳           | 神田町<br>内  | 11.00 | ○   | 左片袖方形  | N-48° E | 4.8   | 2.3  | 不列   | 0.97 不明   |
| 2.  | 木原<br>源治白 | 伊勢山古墳            | 鶴谷町<br>内  | 11.00 | ○   | 左片袖方形  | N-11° W | 4.5   | 2.8  | 1.65 | 1.5 1.5   |
| 3.  | 比佐<br>三千塚 | 羽矢支8号墳           | 東松山市<br>内 | 18.60 | △   | 左片袖方形  | 直       | 4.0   | 2.6~ | 1.06 | 不明 小舟     |
| 4.  | 比佐<br>三千塚 | 第36支馬鹿水原古墳造1部    | 東松山市<br>内 | 35.00 | ◎   | 左片袖方形  | N-10° W | 5.48  | 3.76 | 1.7  | 不明 1.62   |
| 5.  | 比佐<br>三千塚 | 第36支馬鹿水原古墳造2部    | 東松山市<br>内 | 22.00 | ×   | 左片袖方形  | 南南西     | 不列    | 不明   | 不明   | 不明 不明     |
| 6.  | 比佐<br>三千塚 | 第36支馬鹿水原古墳造3部    | 東松山市<br>内 | 90.00 | ○   | 左片袖方形  | N-28° W | 1     | 不明   | 3.5  | 不明 不明 2   |
| 7.  | 足利<br>佐野山 | 生駒山16号墳          | 大里町<br>内  | 55.00 | ○   | 左片袖好子形 | N-10° E | 7.8   | 4.1  | 4.7  | 2.22 2.32 |
| 8.  | 大田<br>野原  | 野原13号墳(野原6号墳)後円部 | 鶴谷町<br>内  | 40.00 | ○   | 左片袖好子形 | 南西      | 4.8   | 3.1  | 1.7  | 不明 1.6    |
| 9.  | 大田<br>千塚  | 高矢支斜坑墓複合後円部      | 東松山市<br>内 | 45.00 | ×   | 左片袖斜子形 | 南南西     | 7     | 3.6  | 3.4  | 2.4 2.4   |
| 10. | 足利<br>吉原  | 十三号墳-13号墳        | 神田町<br>内  | 16.50 | ○   | 左片袖半圓形 | N-41° E | 7.7   | 1.05 | 6.7  | 2 2       |
| 11. | 比佐<br>源治山 | 源治山古墳            | 東松山市<br>内 | 不列    | 不明  | 左片袖半圓形 | 深浅盒     | 3.95  | 1.7  | 2.25 | 不明 2.2    |
| 12. | 大里<br>野原  | 野原1号墳            | 鶴谷町<br>内  | 18.50 | (○) | 左片袖半圓形 | N-14° E | 8.6   | 1.3  | 4.3  | 不明 2.2    |
| 13. | 大里<br>野原  | 野原13号墳(野原5号墳)前方部 | 鶴谷町<br>内  | 41.00 | ○   | 右片袖半圓形 | 南南東     | 3.8~  | 3.2  | 0.6~ | 1.3 2     |
| 14. | 比佐<br>三千塚 | 墨田北野16号墳         | 東松山市<br>内 | 19.00 | ×   | 左片袖半圓形 | 南南西     | 3~    | 不明   | 小明   | 不明 不明     |
| 15. | 大里<br>南大里 | 山下摩西古墳           | 鶴谷町<br>内  | 32.00 | ×   | 片袖不規   | 南       | 11.55 | 5.4  | 5.5  | 2.1 2.3   |
| 16. | 大里<br>野原  | 野原9号墳            | 鶴谷町<br>内  | 10.50 | 11  | 片袖不規   | N-68° E | 不列    | 2.1  | 不明   | 不明 0.95   |
| 17. | 比佐<br>三千塚 | 第36支馬鹿水原古墳       | 東松山市<br>内 | 28.00 | ○   | 片袖不規   | 不規      | 不明    | 不明   | 不明   | 不明 不明     |
| 18. | 足利<br>吉原  | 北堀原5号墳           | 神田町<br>内  | 12.50 | ○   | 片袖不規   | N-26° E | 5.05  | 2.25 | 不明   | 0.98 不明   |
| 19. | 荒玉<br>鎌倉山 | 鎌倉山12号墳          | 東松山市<br>内 | 14.00 | ×   | 片袖不規   | 不規      | 3.2   | 不明   | 不明   | 不明 2.03   |



第11図 片袖石室の諸類型 I

| 手掘番  | 遺物番   | 遺物種類    | 遺物種類      | 遺物種類 | 遺物種類  | 遺物種類 | 遺物種類  | 遺物種類                |
|------|-------|---------|-----------|------|-------|------|-------|---------------------|
| 0.35 | 武藏A   | 鐵石精     | (一) 銅(鉛)銅 | 1段   | なし    | 圓錐石  | 自然石   | 不明                  |
| 0.75 | 水深B   | 過目精     | 平地石を向ける   | 多段階  | 明石    | 鰐吹岩  | 鰐吹岩   | 不明                  |
| 1.1  | 不明    | 瓦石精     | 瓦石        | 下附   | 鰐吹岩   | 瓦石   | 瓦石    | 盛土上<br>(盛土上)        |
| 0.99 | 武藏A   | 過目精・瓦石精 | 過目精       | 1段~  | 青石・劣石 | 配石   | 瓦石    | (土の瓦精)<br>(瓦土上より1位) |
| 不明   | 不明    | 燒石精     | 燒石精       | 不明   | 切石    | 瓦石   | (瓦石精) | 鶴込内(山吉セ)            |
| 1    | (武藏B) | (過目精)   | 燒石精       | 不明   | 切石(?) | 燒石   | 燒石    | 焼土上<br>(土の瓦精)       |
| 不明   | 武藏A   | 過目精・瓦石精 | (過目精)     | 2段   | なし    | 圓錐石  | 自然石   | 不明                  |
| 1.25 | 芦源A   | 過目精     | (長辺精)     | 1段~  | 明石    | 鰐吹岩  | 鰐吹岩   | 不明<br>(盛土上)         |
| 1.3  | 武藏B   | 過目精     | 平地石を向ける   | 多段階  | 鰐吹石   | 瓦石   | 瓦石    | 不明                  |
| 0.85 | 武藏B   | 瓦石精     | 平地石を向ける   | 多段階  | なし    | 瓦石石  | 自然石   | 馬蹄形銅(土の瓦精)          |
| 0.95 | 武藏B   | 瓦石精・瓦石精 | 瓦石精・瓦石精   | 多段階  | 明石    | 鰐吹岩  | 瓦石    | (土の瓦精)<br>(盛土上)     |
| 1    | 武藏B   | 瓦石精     | 燒石精       | 2段   | なし    | 圓錐石  | 片圓錐   | 瓦石精<br>(土の瓦精)       |
| 不明   | 不明    | 過目精     | (長辺精)     | 不明   | 明石    | 瓦石   | 瓦石    | 不明<br>(盛土上)         |
| 不明   | 不明    | 切石精     | 平明        | 明石   | 瓦石    | 瓦石   | 瓦石    | (土の瓦精)<br>鶴込内(山吉セ)  |
| 2    | 不明    | 不明      | 平明        | 明石   | 瓦石    | 瓦石   | 瓦石    | 不地丸                 |
| 不明   | 不明    | 不明      | 仰邊精       | 不明   | (なし)  | 圓錐石  | 自然石   | 不明<br>土族            |
| 0.5  | 不明    | 不明      | 平明        | 不明   | 鰐石    | 瓦石   | 小明    | 不明                  |
| 不明   | 不明    | 鰐石精     | 不明        | 不明   | 瓦石    | 瓦石   | 不明    | 不明                  |



第12図 片袖石室の諸類型2

ら、從来の年代観と同様、6世紀前半の築造と考えられる。

埼玉將軍山古墳は、関義則と宮代栄一の研究によると、馬具は2セットあり、古セットはTK43型式期、新セットはTK43-TK209型式期とされる（関・宮代 1987、宮代・谷畑 1996）。出土埴輪は、山崎式の円筒埴輪編年ではⅢ期（MT85-TK43）とされ、城倉正祥は生山塚埴輪窯跡産埴輪の同工品分析を通してⅡ期とする（山崎 2000、城倉 2011）。須恵器（高環、甕、提瓶、大甕、広口甕、台付長頸甕、有蓋長頸甕）は坂本和俊に

よればMT85-TK43型式期とされ、両袖石室の酒巻21号埴出上須恵器と同時期と推定されている（坂本 1996）。近年、関義則はこうした出土遺物の様相からTK10新相～TK43型式期とする（関 2015）。將軍山古墳の築造年代については、遺物によって時間幅があるものの、近年の埴輪研究を踏まえ、MT85（TK10新相）～TK43型式期の築造と考えておきたい。

三千塚第V支群長塚古墳後円部横穴式石室は、出土埴輪が山崎編年IV期、城倉編年III期後半とされ、およそ6世紀後半の築造とされる（山崎

2000、城倉 2011、金井塚編 2012)。

伊勢山古墳は、出土馬具が関・宮代の研究でTK209 型式期とされ、埴輪をもつ点から 6世紀後半(末葉)の築造とされる(関・宮代 1987)。

#### 左片袖L字形類型

十二ヶ谷戸 15号墳は、小林修のL字形・T字形石室の研究では「T字型・左野・北武藏①類」に該当し、MT15-TK10 型式期とされる(小林修 2008)。小林は上野の事例と比較し T字型とするが、本墳の玄室にははっきりとした張り出しがないため、本稿では L字形として扱う。

調訪山 3号墳は、小林修の「L字型・北武藏②類」に該当し、MT85-TK43 型式期の築造とされる(小林修 2008)。

#### 左片袖羽子板形類型

生野山 16号墳は前部から土師器壺が出土し、MT85 型式に比定されている。

野原 13号墳後円部横穴式石室は、井上裕一の馬形埴輪編年では Vb 期(6世紀第4四半期後半~7世紀初頭)とされる(井上 1995)。

三塚第V支群秋葉塚古墳の後円部横穴式石室は、埴輪を樹立せず遺物も乏しいため根拠に乏しい。この横穴式石室は片袖石室のなかで門柱石をもつ唯一の事例で、門柱石の設置は段積より新しい要素と考えられる。そのため、片袖石室の中では比較的新しい時期の築造で、6世紀末葉から7世紀初頭の築造と推定される。

#### 右片袖彌形類型

野原 13号墳前方部横穴式石室は、前出の後円部横穴式石室の築造が6世紀末葉と推定され、同時期の築造と考えておきたい。ただし、本例は片袖石室で唯一彌形を呈し、これは両袖石室の影響と考えられ、後円部横穴式石室に後出する要素をもつ。

#### 右片袖L字形類型

黒田 4号墳は、出土馬具が MT15-TK10 型式期とされる(関・宮代 1987)。この形態は小林

修の「L字型・北武藏①類」に該当し、TK10-MT85 型式期の築造とされる(小林修 2008)。

そのほかの片袖石室とした事例は、上記類型のほかに山王塚西古墳などがある。山王塚西古墳は遺物に乏しいが、埴輪をもたず土師器壺から7世紀初頭の築造とされる。

#### 4-9 片袖石室の編年試案

第 13 図に編年試案を示した。

片袖石室の傾向としては、先行研究でも言及されてきたように、古い例では MT15 型式期の横穴式石室もある。左片袖方形類型の北塚原 6号墳は、構造や使用石材が無袖短間形 A 類型にも類似するため、両類型の密接な関係が窺われる。

各類型は MT85 (TK10 新) ~ TK43 型式期、TK43 ~ TK209 型式期の例が主体をなし、終末期の事例は少ない。ややバラツキがみられるものの、片袖石室の築造のピークは、無袖石室(6世紀前半)と両袖石室(6世紀後半~7世紀)の間にある。

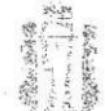
### 5. 横穴式石室の導入と無袖・片袖石室

#### 5-1 横穴式石室の導入

無袖石室が造られる MT15 型式期は、埼玉県内における横穴式石室の導入期にあたる(註 6)。

横穴式石室の導入は、児玉地域と大里西部(荒川左岸域)地域における群集墳内の小円墳から始まる。これは、両地域においても限定的な現象で、この時期に広範囲にわたって横穴式石室は波及していない(第 14 図)。比企地域や北埼玉地域など、横穴式石室を造らない地域では、依然として竪穴系埋葬施設(木棺直葬等)が継続する。

児玉地域が横穴式石室の導入を先行する点は、多くの研究者が西毛との交流の結果と捉えており、筆者も同意見である。無袖短間形 A 類型は、群馬県安中市周辺の古墳(下増田上田中 1 号墳など)と類似する。また、無袖石室は、導入期の事例であっても、竪穴系埋葬施設の構造ではなく、

| 年代                   | 須恵器                   |  |
|----------------------|-----------------------|--|
| 500                  | MT15                  | <p style="text-align: center;"><b>左片袖方形</b></p>  <p>北堀第6号</p>     |
| TK10                 |                       | <p style="text-align: center;"><b>左片袖L字形</b></p>  <p>十二ヶ谷芦16号</p> |
| 550<br>(TK10<br>(新)) | MT85<br>(TK10<br>(新)) | <p style="text-align: center;"><b>左片袖羽子板形</b></p>  <p>生野山16号</p>  |
|                      | 得高山復原圖                |  <p>得高山</p>   |
|                      |                       |  <p>伊豆山</p>   |
| TK43                 |                       |  <p>Nishioyama (後)</p>  |
|                      |                       |  <p>Nishioyama 3号</p>   |
| TK209                |                       | <p style="text-align: center;"><b>右片袖羽子板形</b></p>  <p>里田4号</p>    |
| 600                  |                       |  <p>Nishioyama 13号</p>  |
|                      |                       |  <p>Nishioyama 13号</p>  |
|                      |                       |  <p>Nishioyama 13号</p>  |
|                      |                       |  <p>Nishioyama 13号</p>  |

第13図 埼玉県における片袖石室の編年

門や裏込構造をもち、葺石等の外表施設とも関連した整然な石材配列が認められる。つまり、古墳各部の構造が、横穴式石室の構造と構造に対応していると言え、これは横穴式石室以前の古墳建築技術からの漸移的な変化ではなく、横穴式石室を造るための古墳構造そのものが、西毛よりもたらされた結果と考えられる。導入期の事例であっても、同上石室と考えられる事例があることも、これで補強するだろう。

無袖石室には、前方後円墳や帆立貝形古墳の例もみられる（第1表）。児玉を中心に、比企（岩鼻1号？）、北埼玉（酒巻6号）、北足立（川田谷ひさご塚）に分布する。現状では、児玉地域の秋山調訪川古墳や広木大町8・9号墳が、TK10型式期段階の築造で、県内の前方後円墳の中で横穴式石室を導入した例と考えられる。この点についても、児玉地域が先行する。

## 5-2 屋田5号墳の評価

屋田5号墳は、比企地域における横穴式石室の導入事例である。構造は児玉地域の事例と類似するが、大きく異なるのは、凝灰岩の加工材を用いる点と、裏込が十の互層類型を探る点である。本墳では側壁・奥壁石材に工具痕が認められ、室内に向く面のみを加工している（青木2015b）。石材間の目地の処理は難で、切石というより割石に近い。床面下には凝灰岩パラスが敷かれるが、これが壁体の石材加工に伴うものかどうかは不明である。基礎構造は凹表十直上類型で、根石設置部分を溝状に掘り込むという特徴をもつ。

本墳と近い時期に造られた調訪山3号墳や調訪山4号墳をはじめ、横穴式石室の導入以降、比企地域で盛んに造られる切石積石室の多くは、凝灰岩を使用し、裏込構造は土の互層類型を中心をなす（青木2013b）。調訪山3号墳、4号墳では切石を用いており、とくに調訪山3号墳では、石材の肩が検出されているため、現地で石材加工をしたと想定できる。

屋田5号墳や調訪川3号墳など、比企地域における導入期の横穴式石室に、こうした点が確認できることは、横穴式石室の築造技術の系譜を捉える上で重要である。比企地域における凝灰岩切石積両袖石室は、現状ではその平面形・立面形は県内の事例に系譜を追うことが難しい。しかし、本稿で確認したように、石材加工や裏込構造の面では、両袖石室に先行する無袖石室の事例にも、技術の一端が見受けられることから、後の両袖石室を造るための技術的素地があつたと考えられる。

また、坂本和俊が言及するように、児玉地域と比企地域とで横穴式石室の使用石材と加工法に違いがある点は、同じ無袖構造の横穴式石室でも複数の技術系譜が存在する可能性を示唆する（坂本1979）。

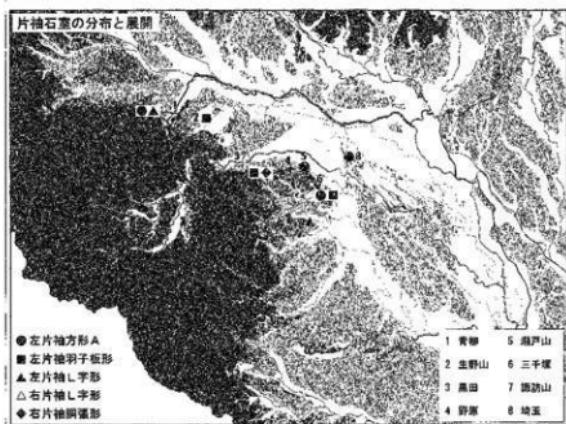
### 5-3 片袖石室にみる横穴式石室の展開

片袖石室は北塙原6号墳のように、MT15型式期（6世紀前半）の事例も少数あるが、多くはMT85～TK43型式期（6世紀中葉）以降の事例である（第14図）。事例の多くは左片袖で、右片袖は黒山4号墳（L字形）と野原13号墳前方部（剣張形）の2例しかない。

左片袖石室には、前方後円墳が6例あることが目を引く。そのなかでも埼玉將軍山古墳は、かねてより注目を集めてきた。

將軍山古墳は横穴式石室や出土遺物の研究から、本墳の数々の特徴が取り上げられている。横穴式石室に関しては、房州石が地域間交流の代表例とされる。もちろんこうした一面は認められるものの、横穴式石室の地域展開という侧面で見直すと、やや異なる面もみえる。

すなわち、将軍山古墳が造られた時期は、無袖・片袖石室に加えて、両袖石室が若干例確認できる程度に過ぎない。そのため、本墳の築造（墳上古墳群への横穴式石室の導入）をもって、地域全体が横穴式石室を採用したとは即断できないのである。また、将軍山古墳は前方部に木棺直葬を伴う。



第14図 無神行室と片神行室の分布と展開

この点が、豊穴系埋葬施設から横穴式石室へ移行する段階の状況を示す可能性をもつことも考慮すべきだろう（清家 2005）。

横穴式石室の地域展開については、むしろ、後続する鉄砲山古墳にも注意を払うべきである。鉄砲山古墳は近年の調査により、角閃石安山岩と緑泥片岩を用いた横穴式石室の可能性が高まっている（堀口 2015）。鉄砲山古墳が建築される時期は、比企地域で凝灰岩切石積荷袖石室が導入され、大宮台地周辺にも横穴式石室がみられる。

また、城倉正祥による生出塚窯跡産埴輪の分析では、鉄砲山古墳段階になり、東京湾岸の古墳まで生出塚産埴輪が流通することが明らかにされている（城倉 2011）。横穴式石室と埴輪の展開が軌を一にすると即断できないが、注意すべき動向である。埼玉古墳群と横穴式石室や埴輪といった各様相の展開は、今後、より慎重に検討していく必要があるだろう。

#### 5-4 無袖石室と片袖石室の関係

無袖石室と片袖石室の類型間で、関係を窺える例は、無袖短円形A類型の北塚原2・7号墳と左片袖方形類型の北塚原6号墳である。これらの事例は、小円墳であり、横穴式石室の奥壁・側壁の石積みが共通する。規模は6号墳例がやや小さい。6号墳は、同じ類型内の事例よりも、別類型の2・7号墳との共通点が多く認められる。青柳古墳群の同一支群内に所在することから、こうした共通点があると考えられる。

#### おわりに

本稿では、埼玉県内の無袖・片袖石室の分類と編年を試み、最後に若干の考察を行なった。

横穴式石室の分類は、平面形を中心形態分類を行ったが、これらは太田の「作業的な分類単位（単位ア）」に相当する（太田 2010）。類型間の関係は、各類型の展開や各類型の系譜、あるいは古墳の階層性なども視野に入れて把握に努めてい

きたい。

次稿では、両袖石室について検討したい。

#### 謝辞

本稿の執筆をはじめ、大谷徹氏、小林孝秀氏、草野潤平氏、藤野一之氏からは常日頃、多くのご教示を賜っております。末筆ではありますが、衷心より御礼申し上げます。

註1 太田はこうした分類概念を整理した上で、横穴式石室の分布や階層に関する概念設定も行っている（太田 2011）。この内容は本稿の内容から逸脱するため、稿を改めて検討したい。

註2 前稿で扱った「同工石室」については、発表後、上生田純之先生、ならびに小林孝秀氏より貴重なご助言を賜りました。記して感謝を申し上げます。筆者の力量不足により、本稿では全てを活かすことはできておりませんが、引き続き検討していかたいと思います。

註3 土生田は白石太一郎が分類した「a類」を対象に分析を行った（白石 1988）。

註4 裏込構造と基礎構造の分類は、拙稿で行った（青木 2013b）。

註5 ここで示した須恵器型式編年は、田辺昭三編年である（田辺 1981）。なお、FA 降下年代について、早川由紀夫氏やパレオ・ラボ（株）のチームによって、2008 年以降理化学的分析（AMS・年輪年代）が報告されている。その結果、棟名山二ツ岳の噴火と FA の降下年代は、西暦 497 年前後と報告された（早川ほか 2015）。

これに対し、藤野一之は、群馬県下で出土した FA 層直下の一括性の高い遺物群を対象として、MT15 型式前後の須恵器を再検討した（藤野 2009）。結果、MT15 型式期が 5 世紀後半に遡る可能性、TK23 型式～MT15 型式期の年代観を再検討する必要性を提起している。

註6 埼玉県内の横穴式石室の動向は、近年では小林孝秀氏の研究がある（小林 2008）。乍らも群集墳と横穴式石室について取り上げた（青木 2016）。

## 引用・参考文献

- 青木 弘 2013a 「埼玉県内横穴式石室の事例集成」『研究紀要』第 27 号 pp.79-108 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 弘 2013b 「横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造—埼玉県の事例を対象として—」『古代』第 131 号 pp.109-141 早稲田大学考古学会
- 青木 弘 2015a 「埼玉県における後・終末期古墳の築造技術—築造工程と「同工石室」の検証—」『埼玉考古』第 50 号 pp.55-100 埼玉考古学会
- 青木 弘 2015b 「埼玉県における横穴式石室の石材加工について」『研究紀要』第 29 号 pp.51-80 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 弘 2016 「埼玉県における群集墳の展開」「群集墳展開の共通性と地域性—王權・地域首長と群集墳被葬者—」東北・関東前方後円墳研究会第 21 回大会発表要旨資料 pp.95-114 東北・関東前方後円墳研究会
- 井上裕一 1995 「馬形埴輪の研究—画期の設定—」『古代探鉱 IV。一瀧口宏先生追悼考古学論集』 pp.347-393 早稲田大学出版部
- 太田宏明 2003 「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第 15 号 日本考古学協会
- 太田宏明 2010 「考古資料の分類単位と過去の社会組織—横穴式石室の分類・整理を通じたモデルの提唱—」『考古学雑誌』第 94 卷第 2 号 pp.1-29 日本考古学会
- 太田宏明 2011 「考古資料に見られる分布境界領域の様相」『考古学研究』第 57-4 pp.71-89 考古学研究会
- 岡本健一 1994 「埼玉将軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告』第 7 号 pp.47-54 埼玉県立さきたま資料館
- 尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 河上邦彦 1995 「後・終末期古墳の研究」雄山閣
- 草野潤平 2010 「武藏」「東日本の無袖横穴式石室」 pp.120-134 雄山閣
- 小林 修 2008 「北関東における T・L 字形横穴式石室の様相」『埼玉考古』第 43 号 pp.47-64 埼玉考古学会
- 小林孝秀 2008 「北武藏における横穴式石室の動向とその系譜」『専修史学』第 44 号 pp.4-31 専修大学
- 酒井清治 1989 「古墳時代の須恵器生産の開始と展開—埼玉を中心として—」『研究紀要』第 11 号 pp.1-26 埼玉県立歴史資料館
- 坂本和俊 1979 「袖無型石室の検討」『原始古代社会研究』第 5 号 pp.6-89 原始古代社会研究会
- 坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と元那志国造」『群馬考古学手帳』第 6 号 群馬県上野観会
- 塙野 博 2004 「埼玉の古墳」5 分冊 さきたま出版会
- 城倉正祥 2011 「北武藏の埴輪生産と埼玉古墳群」奈良文化財研究所
- 白石太一郎 1988 「伊那谷の横穴式石室（一）（二）」『信濃』第 40 卷 7・8 号
- 杉井 健編 2009 「九州系横穴式石室の伝播と拡散」日本考古学協会 2007 年度熊本人会分科会 1 記録集 北九州中国書店
- 清家 章 2005 「後円部と前方部の被葬者」『井上内藤荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第 3 号 pp.407-424 大阪大学文学研究科考古学研究報告
- 閔 義則 2015 「北武藏の古墳編年」「地域編年から考える一部分から全体へ—」東北・関東前方後円墳研究会第 20 回大会シンポジウム発表資料 pp.25-42 東北・関東前方後円墳研究会
- 閔 義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』第 14 号 pp.3-55 埼玉県立博物館
- 禮瀬芳之 1991 「埼玉県の猪付大刀」『研究紀要』第 8 号 pp.101-126 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 上生田純之 2013 「第 2 節 伊那谷における横穴式石室の一考察」『飯田古墳群—論考編—』 pp.9-30 飯田市教

#### 育委員会

- 早川由紀夫・中村賢太郎ほか 2015 「榛名山で古墳時代に起きた波川噴火の理学的年代決定」『群馬大学教育学部紀要』自然科学編第 63 卷 pp.35-39 群馬大学教育学部
- 藤野一之 2009 「Hi-FA の降下年代と須恵器層年代」『上毛野の考古学』Ⅱ一群馬考古学ネットワーク 5 周年記念論文集 pp.69-78 群馬考古学ネットワーク
- 藤野一之 2013 「古墳時代における藤岡塚須恵器再考」『埼玉考古』第 48 号 pp.41-54 埼玉考古学会
- 堀口智彦 2015 「7. 行田市埼玉古墳群（鉄砲山古墳）の調査」『第 48 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 pp.26-29 埼玉考古学会・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 増田逸朗 1977 「北武藏における横穴式石室の変遷」『信濃』第 29 卷第 7 号 pp.64-81 信濃史学会
- 増田逸朗 1995 「北武藏における初期横穴式石室 導入期の様相」『調査研究報告』第 8 号 pp.1-12 埼玉県立さきたま資料館
- 増田逸朗ほか 1989 「埼玉県における横穴式石室の受容」『東日本における横穴式石室の受容』第 2 分冊 pp.712-804 千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会・群馬県考古学研究所
- 宮代栄一・谷畠美帆 1996 「統・埼玉県内出土の馬具一副葬品としての馬具分析の問題点」『埼玉考古』第 32 号 pp.117-152 埼玉考古学会
- 山崎 武 2000 「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』第 4 号 pp.109-120 墓輪研究会
- 山崎 武・金子彰男 1997 「北武藏の横穴式石室と前方後円墳」『横穴式石室と前方後円墳』東北・関東前方後円墳研究会第 2 回大会発表要旨資料 pp.27-40 東北・関東前方後円墳研究会

#### 報告書

- 今井 宏・立石盛嗣・酒井和子 1984 「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告一XⅧ-屋田・寺ノ台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 32 集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大谷 徹 1999 「箱石遺跡第 1 号出土埴輪について」『城見上／未野Ⅲ／花園城跡／箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 211 集 pp.204-214 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岡本健一 1997 「将軍山古墳（史跡埼玉古墳群整備事業報告書）一史跡等活用特別事業一」埼玉県教育委員会
- 小沢良樹ほか 1980 「広木大町古墳群」埼玉県遺跡調査会報告第 40 集 埼玉県遺跡調査会
- 金井塚良一 1972 「中原遺跡」東松山市教育委員会
- 金井塚良一ほか 1970 「埼玉県東松山市高坂 湿防山古墳群（第一次発掘調査報告）」東洋大学考古学研究会発掘調査報告第 1 集 考古学資料刊行会
- 金井塚良一編 2012 「三千塚古墳群—発掘調査の概要—」東松山市文化財調査報告書第 66 集 東松山市教育委員会
- 川越市 1972 「川越市史」第 1 卷 原始古代史料編
- 川本町 1989 「川本町史」通史編
- 君島勝秀・大谷 徹 1999 「長沖古墳群 県道秩父児玉線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 234 集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 熊谷市 1963 「熊谷市史」前編
- 小泉 功 1997 「山王塚脇遺跡 第 1 次～第 3 次発掘調査報告」川越市遺跡調査会報告書第 20 集 川越市教育委員会・川越市遺跡調査会
- 小林 戊・猪野幸夫 1975 「吉田町安中 1 号古墳の調査」『第 8 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会
- 駒宮史朗・増田逸朗・菅谷浩之 1973 「青柳古墳群」埼玉県遺跡調査会報告第 19 集 埼玉県遺跡調査会
- 齋藤国夫ほか 1987 「酒巻古墳群 昭和五八年度～昭和六〇年度発掘調査報告書」行田市文化財調査報告書第 18

### 集 行田市教育委員会

- 塙野 博 1969 『川田谷ひさご塙古墳・加納入山遺跡』桶川町文化財調査報告Ⅱ 桶川市教育委員会
- 塙野 博 1981 『見日古墳群とその出土遺物』『埼玉考古』第19号 埼玉考古学会
- 塙野 博・小久保 徹 1975 『黒田古墳群』黒田古墳群発掘調査会
- 塙野 博・駒宮史朗 1978 『川田谷古墳群』桶川市文化財調査報告第10集 桶川市教育委員会
- 青谷浩之・上里村教育委員会 1970 『人御堂縄縄塙古墳調査報告書』
- 青谷浩之・駒宮史朗 1973 『児玉町・美里村牛山古墳群発掘調査概要』『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県遺跡調査会
- 菅谷浩之・笹森健一 1975 『広木大町古墳群調査概報』美里町教育委員会
- 青谷浩之ほか 1980 『長沖占塙群 児玉町児玉南土地区画整理事業発掘調査報告』児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
- 菅谷浩之・大谷 徹・鈴木徳雄・田中広明 1990 『秋山古墳群—庚申塙古墳・鐵筋山古墳の調査』児玉町史資料調査報告古代第2集 児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会
- 関口正幸・市川康弘 2008 『月輪遺跡群 滑川町月輪上地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 〈月輪古墳群編〉 滑川町月輪遺跡群発掘調査会
- 瀬瀬芳之 1986 『小前田古墳群 国道140号バイパス関係(寄居町・花園町)工区埋蔵文化財発掘調査報告—V—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田村 誠 2004 『中新里源訪山古墳—第2次・3次調査—』神川町教育委員会文化財調査報告第21集 神川町教育委員会
- 田村 誠・金子彰男 1994 『源訪ノ木古墳の調査』『庚申塙古墳・愛染遺跡・安保氏館跡・源訪ノ木古墳』神川町教育委員会文化財調査報告第11集 神川町教育委員会
- 田村 誠・金子彰男 1997 『青柳占塙群城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』神川町教育委員会文化財調査報告書第16集 神川町教育委員会
- 田村 誠・金子彰男 2012 『青柳古墳群南塙原支群Ⅲ』神川町埋蔵文化財調査報告第5集 神川町教育委員会
- 東京大学考古学研究室 1964 『埼玉県宮前村の古墳』『考古學雑誌』49-4 pp.18-28 日本考古學會
- 長瀬敬康 2002 『埼玉県美里町 白石古墳群発掘地区・中原地区』美里町遺跡発掘調査報告書第13集 美里町教育委員会
- 長瀬敬康・中沢良一 2003 『埼玉県美里町 白石古墳群Ⅱ 後海道地区・久保地区』美里町遺跡発掘調査報告書第14集 美里町教育委員会
- 柳田敏司 1962 『おどる埴輪を出土した前方後円墳について』『埼玉研究』第6号 pp.46-50 埼玉地理学会・埼玉県地方史研究会・埼玉県考古学会
- 皆野町 1988 『皆野町史』通史編
- 立正大学考古学会 2008 『野原古墳群発掘調査報告書』

### 図版出典

第1図 (太田 2010)

第2図 図版は下記文献から引用し、作成(古墳名50音順)

秋山源訪山古墳(菅谷ほか 1990) / 北塙原2号墳(増田ほか 1989) / 城戸野1号墳(駒宮ほか 1973) / 源訪山4号墳(金井塙ほか 1970)

第3図 図版は下記文献から引用し、作成(古墳名50音順)

秋山源訪山古墳(菅谷ほか 1990) / 小兒真觀寺古墳第1主体部(田中・大谷 1989) / 龍原裏8号墳(松田 2005) / 北田2号墳(植木ほか 1987) / 黒田4・9号墳(塙野・小久保 1975) / 小松1号墳(矢口・瀬瀬 1996) / 立野

2号墳（森田・吉野 2013）/塚本山11号墳（増田ほか 1977）/西原1号墳（金井塚編 1976）

第4図～第7図・第8図・第10図 図版は下記文献から引用し、筆者作成（古墳名50音順）

秋山諫訪山古墳（菅谷ほか 1990）/安中1号墳（小林ほか 1975）/岩鼻1号墳（金井塚 1972）/大塚4号墳（天神塚）（皆野町 1988）/大御堂福荷塚古墳（菅谷・上里里教育委員会 1970）/小前田9・10号墳（瀧瀬 1986）/川田谷ひさご塚古墳（塙野 1969）/北塚原2・7号墳（増田ほか 1989）/黒田3・6・7・8・9・11号墳（塙野・小久保 1975）/酒巻6号墳（齊藤 1987）/三千塚V-3号墳（金井塚編 2012）/十二ヶ谷戸10号墳（駒宮ほか 1973）/十二ヶ谷戸17号墳（田村・金子 1997）/白石11号墳（反瀬 2002）/白石41号墳（後海道5号墳）・白石49号墳（久保2号墳）（長瀬・中沢 2003）/城戸野1号墳（駒宮ほか 1973）/諫訪ノ木古墳（田村・金子 1994）/諫訪山4号墳（金井塚ほか 1970）/平1号（羽尾）（東京大学考古学研究室 1964）/塚原1号墳（川日本町 1989）/塚原3号墳（川日本町 1989）/月輪6号墳（関口・市川 2008）/洞魂淵7号墳（小渕ほか 1980）/長沖8・13・28号墳（菅谷ほか 1980）/中新里諫訪山古墳（田村 2004）/野原7号墳（立正大学考古学会 2008）/原山23号墳（塙野・駒宮 1978）/広木大町8・9・15号墳（菅谷・斎森 1975）/広木大町4号墳（増田ほか 1989）/南塚原20・46号墳（田村・金子 2012）/見目1号墳（塙野 1981）/屋田5号墳（今井・立石・酒井 1984）/南塚原6号墳（駒宮ほか 1973）/第9図（増田ほか 1989）

第11～13図 図版は下記文献から引用し、筆者作成（古墳名50音順）

伊勢山古墳（熊谷市 1963）/北塚原6号墳（増田ほか 1989）/黒田4号墳（塙野・小久保 1975）/三千塚V-2号・V-秋葉塚・轟-長塚（金井塚編 2012）/十二ヶ谷戸15号墳（駒宮ほか 1973）/将軍山古墳（岡本 1997）/諫訪山3号墳（金井塚ほか 1970）/生野山16号墳（菅谷・駒宮 1973）/野原13号墳（柳田 1962）

第14図 横穴式石室は上記文献より引用。

第1表・第2表 筆者作成

## 研究紀要 第30号

—設立35周年記念—

2016

平成28年3月14日 印刷

平成28年3月18日 発行

発行 公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市駒木台4丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社